01
02
05
07
A
B
D
F
G
平瀬村
小中学校
氷川村

僕ら同世代の人たちが見たら、第一印象は、すっげえなあ、おもしれぇなあ、と思うでしょう。大人であれば、この映画の強烈なメッセージ性というものに対して、何かを問いただしたい気分に、きっとなると思います……。

秋也の心の変化を考える

七原秋也をどう演じるか、まず悩みました。秋也が体験していることが僕の生きてる状況とあまりにも違う。でも多分、秋也もフツーの人で、ふだんは真面目なこともくだらないことも考えているんだろうとか考えてみました。

秋也の気持ちになったとき、僕の中で、すごく頭の回転が早くなったんです。秋也の中では、いろんなことがものすごい勢いで起こっていったんだろうなと。親父が死んだ、母親が出て行った。で、施設で過ごして。そんな次々と厳しい状況が降りかかってきていたら、何だろう？ かえって冷静になってしまうのかなと。友達と遊んでても、遠くから見ている感じがするのかな。僕の中にも、仲のいい友達と遊んでても、どこかで心ここにあらずみたいな、自分を客観的に見てしまうときがあるなぁと、重ねてみたりしました。秋也は、僕と同じ動物占いではひつじ（厚い皮をかぶって本音をみせない）であろうと設定してみたりもしました（笑）。

秋也は修学旅行にでかけてバスが乗っ取られて、ますます何がなんだかわかんなくなっていく。そんな中で、秋也の精神がどうなるのか僕にはわからなかったんです。それを監督に伝えると、「秋也は、この状況を徐々に理解していかなくてはいけないのだ」と説明されました。だから最初はとにかく秋也の不安な気持ちを出していこうと思いました。最初の教室のシーンは、演じていても、ほんとに不気味な感じだったんですよ。教室のシーンは、大変でした。2週間くらいかけて撮影してるんです。

藤原竜也

七原秋也

1982年5月15日生まれ。蜷川幸雄演出による舞台「身毒丸」(97)でデビュー後、舞台、ドラマで活躍。
主なTV出演作はTBS「L×I×V×E」、CX「恋ボーイ恋ガール」(99)など。
映画は『仮面学園』(00)が初出演で初主演。

友達の死を目の前にしたときの行動や気持ちを、どう表現していいのかもわからなかった。親友のノブが爆死するシーンがありますが、助けに出たほうがいいんですかね？ と監督に聞きましたが、死への恐怖に体がすくんで動かないほうがリアルだということになりました。気持ちと体がバラバラだということなんです。

それから、次第に秋也の心境は変わっていきます。3日間——3日間でやらなきゃあとがない状況に秋也は置かれています。秋也の目の前で、友達が死んで、親友が死んで、自分にも凶器がむけられる。そして秋也は銃をとる。少年が拳銃を手にしたときの持ち方も、撃ち方もわからないですから、すごく悩み苦しみました。やむを得ないという気持ちもあるんだろうけれど、重要なのは、とても大切な人を守るために、初めて武器を持つということだと思います。「武器持ってきた」というシーンは、なんかすごくいいシーンですよね。

狂気、爆発、ヘビィな現場

実は撮影に入る前に、64キロから59キロまで体重を落としたんです。3週間ぐらいかな、毎日ずーっと走ってました。

アクションもがんばりましたよ。小屋が爆発するところで飛ぶというアクションをやったのですが、JACの方にお世話になりました。JACの方が竜也に飛ばせたいって言ってくれて、僕も飛びたいですと希望しました。爆風がすごくて怖かったですけど。爆薬がしかけてある部分に足がついたら爆発する仕組みなんです。ということは、足をつけた瞬間にコケちゃったら、もう死ぬわけで……。凄い緊張感でした。おかげですごくいい場面になったんじゃないかと思います。秋也は基本的にあまり戦わないんですが、桐山に海岸で襲われるシーンは、桐山の狂気にあてられて気持ち悪くなりました。安藤君は、現場で仲良くしてくれていたんですが、なぁなぁにならず、微妙にシャッターをおろしていてくれた気がして、それがこの芝居に役に立った気がしているんです。

最後に、秋也はキタノを撃って自らの手を汚します。そして、典子も渋谷の街を走るときにナイフを持ってくる。これらのシーンは、台本にはなかったのですが、付け加えられていました。「キレイなままで終わるのは、虫がよすぎるよ」と監督は言ってました。キレイなままとそうでないということがどちらがいいのか、僕にははっきりとは言えないけれど、深作監督が選んだエンディングはいいものになったと思います。

オレは弱いけど、頼りになんないけど、中川の側にいる…典子を守る。

TATSUYA FUJIWARA AS NO.15 SHUYA NANAHARA

前田亜季

中川典子

1985年7月11日生まれ。CMデビュー後ドラマ、映画、舞台と幅広く活躍中。
主な映画出演作は『トイレの花子さん』(95)、『学校の怪談3』(97)など。
『風を見た少年』(00)では声優として出演。

典子とキタノ先生の特別な関係は、原作にはなかったものなんです。台本を読んだときに、これはどういうことなんだろう？　と不思議に感じて、監督や健太さんに聞いたこともありました。キタノは、娘からも生徒からも嫌われて、ひとりですごく寂しいという感情があると思うんです。典子にも、そういう、ひとりで寂しい感情がどこかでわかっていたんですよね。典子とキタノは何か特別な思いでつながれていたんでしょうね。だからこそ、キタノを刺したナイフを大切に隠し持っていたのかな。そのナイフがこの映画の、最初と最後で重要な役割を果たすんですね。

典子は芯の強い女の子

典子という女の子は、他人の意見に左右されない、ちゃんと自分の考え方を持っている子です。秋也がみんなで力を合わせて逃げようと理想論を語るときも、みんなを信じることができないという、意外と冷静な発言をする。周りを観察している大人の部分も持っているんです。でも、自分が好きな人のことは最後まで信じて、いっしょに生きていこうとする、すごく芯の強い女の子だと思いました。最後まで好きな人を信じるっていう典子の気持ちは、理解するというか、すごいな、うらやましいなっていう気持ちですね。私なら、ああいう状況に立ったときに、典子みたいな強さがあるのかなぁと考えると、あそこまでひとりの男の子を信じてがんばることは、自分にはできないような気がします。典子みたいに強い子は、なかなかいないんじゃないかな。芯は強いけれど、クッキーを焼いたり、とても女の子らしいところも典子にはあります。かわいいなぁって、共感を覚えました。秋也にもキタノにも助けられて、典子っていいですよね（笑）。傘をもらうシーンも、原作にはない、いい場面ですね。

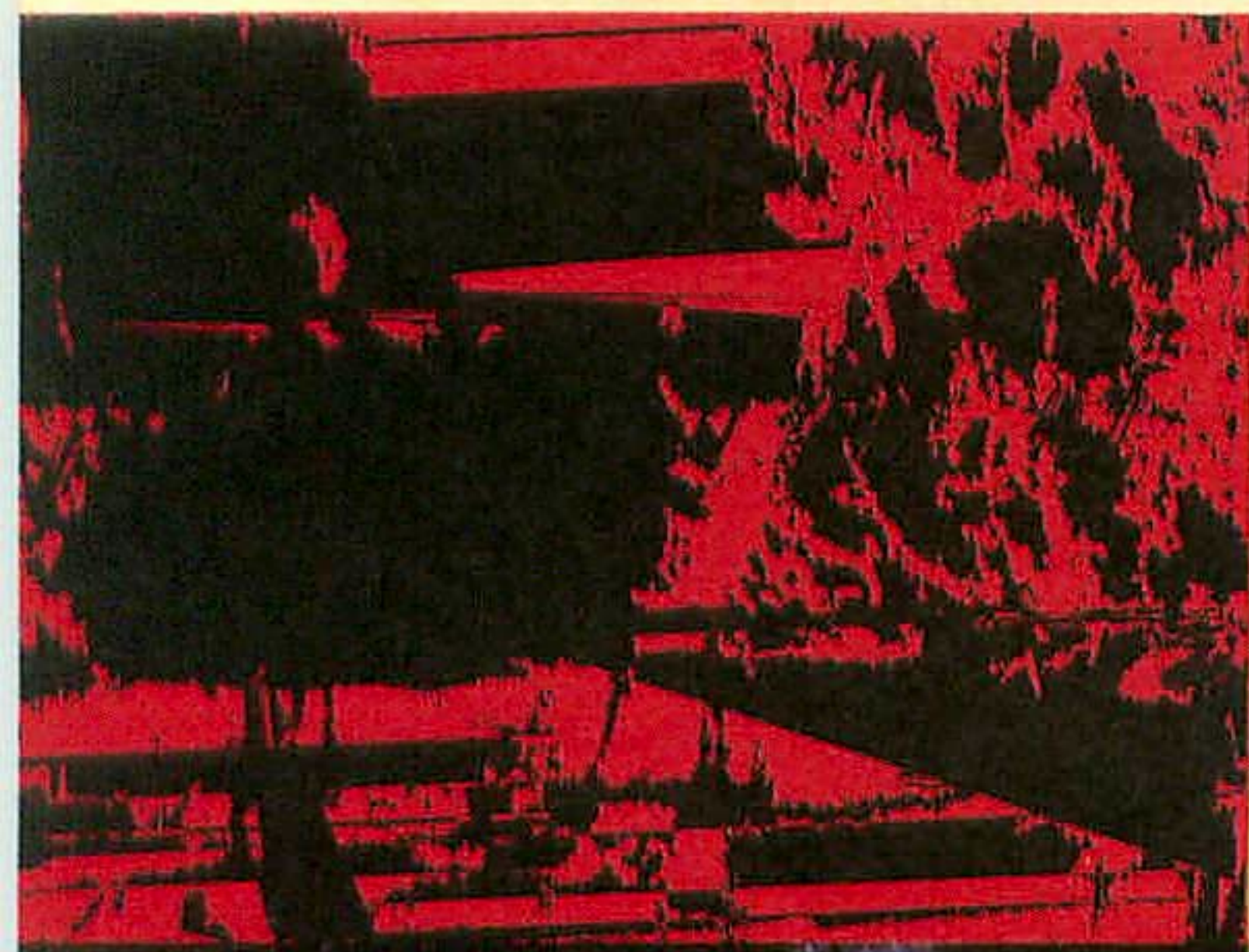
典子の武器は、双眼鏡だったんですが、キタノが刺されたナイフを持っていたり、最後に、キタノと会う場面では拳銃を持ったりします。ナイフを持った感触は、典子もこれをどうしたらいいのかわからなかったと思うんです。すごく混乱しちゃったと。私自身も、典子はこれをどうするんだろう？　って心配になってしまうほどの、意味深い場面ですよね。キタノが死ぬ場面は、とても難しいシーンでした。キタノに銃を向けるけれど、やっぱり撃てない。典子は「撃てない、撃てない、どうしたらいいの!?」って混乱していると、秋也が、「オレが守るんだ」と思って代わりに撃つ。典子は怖かったし、いろんな気持ちでいっぱいいっぱいだったのだろうなと思い演じました。私だったら、相手が銃を構えてきて、水鉄砲だってわからないんだから、ただもう怖くて…逃げるか、ワケがわからなくなって、バーッと撃っちゃうかもしれない。だから、あそこで撃たなかったっていう、典子の自制心は…演じていてもすごいなって思います。ああいう逆境に立ったときは、自分以外信じられなくなりますよね。自分を守らなきゃという一心で武器を手にして撃っちゃうことも、わからないわけじゃない。やっぱり怖いから……。

アクションと間、新たな発見

撮影は大変でした。アクションもいっぱいでしたから。でもやっぱり監督が、適切な説明を、私がわかるまで丁寧にしてくださったので、あまり難しいなと考えずに楽しんでやれたんです。私が一番悩んだことは、「間が長い」と言われたこと。撮ったVTRを見せてもらって「アップで観ると表情で、間の意味がわかるけれど、引きで見ると、細かいところまで映らないから、間をつくると、何もしてないように見えちゃう」と教わったんです。今まで全然考えていなかったことでした。感情を大切に演じるだけでなく、効果的に時として演技を変えることを勉強しました。毎日、毎日が新しいことを勉強していけて、楽しかったですね。

スタッフもキャストも仲良くて、楽しいんだけど、みんなでひとつのものをつくるといういい意味での緊張感もちゃんとあって、すごくいい現場でした。激しいシーンが多いから、怪我をしちゃいけないと常に緊張を保ちながら撮影が進んでいました。大きな怪我はありませんでしたが、足腰とか全身痛かったですね。

今回、今まで私がやってきたものとは違う、新たなお芝居をしたという感じがします。改めてお芝居って楽しいなって思いました。できあがったものを観て、今までにない映画だ！　と、すごく感動と衝撃を受けました。この映画で勉強したことを次に生かして、この先もお芝居を続けていきたいと思います。

秋也だけは信じてる。

深作監督のアクション映画好きなんです。劇場で観ていて、「WOW！」とか言いたくなる。アメリカとかで映画を見ると、皆が「WOW！」とか「イエーイ！」とか、映画を観ながら拍手したりしてるんですけど、深作映画もそういう熱いノリなんですよ。

川田の背負ったもの

あつかましいと思われるかもしれませんが、今までやってきた役の中で、一番川田章吾が僕自身に近い気がするんです。台本を読んだとき、桐山みたいなイカレサイコな役にも魅かれるんですが、川田の背負ってきた重いものに魅かれました。この映画のクラスの中では、川田みたいなトラウマを背負った奴はいないと思うんです。川田は、まだ子供のくせに自分を制する強さを持ってしまった。その凄く悲しい感じを出すのは難しいですよね。それをまったく技術だけで通そうとしたらたぶん無理だと思うんです。自分の持ってるものを多少でも出していかないと無理だと。

山本太郎（川田章吾）

1974年11月24日生まれ。数々の映画、ドラマ、バラエティー等で幅広く活躍中。主な映画出演作は『マルタイの女』(97)、『ラブ・レター』(98)、『ビッグ・ショー！ハワイに唄えば』など。

僕は16歳くらいで東京に出てきて、芸能界に入りました。そこで、たくさんの大人とのやり取りをしてきたことも、僕にとってのひとつの「背負ったもの」だったかなぁと思うんです。大人にならなきゃと自分に厳しく生きてきたみたいな部分があって。25歳の僕が、川田をやらせていただけたのは、その似てる部分に深作さんが気づいてピックアップしてくれたんじゃないかと思うんです。川田は25歳くらいの人間の歴史みたいなものを背負ってるってことなんでしょうね。ま、僕の体験は、この作品の状況に比べたら、ちっぽけなんですけど。『バトル・ロワイアル』の中には、日常でも出会う出来事が隠されているのだと思います。

クライマックスの北野と対峙するシーン。あそこは本当は川田が殺す予定だったんですけど、七原に変わったんです。最初は俺が殺したかったと思ったんですよ。でも考えてみると、こんな狂った世の中で、一人も人を殺さずに七原たちが世の中に出ていってしまう時のことを考えたら、あまりにもちょっと先がなさすぎるような気がしたんです。どんな映画でも、最初はひ弱な奴が、だんだんいろんな場面をくぐり抜けて、どんどん大人になって、最後には頼れる男になっていったという話の方が、観ている人も感情移入がしやすい。『ゴッド・ファーザー』にしてもそうじゃないですか。だから、川田は静かに見守るほうがよかったと思います。

深作さんが決めたことに、殆ど反論の余地はないですね。深作さんが提示してきたものというか、求めてきたものはあまりにも無駄がなさすぎる。ハイブリットです。凄いですよ。出来上がってます、完璧に。深作監督からは、凄いバイブレーションが伝わってきましたね。深作監督にオーディションではじめて会った時、杖をついてたのに、現場では走ってました。なんだったんだ、あの杖？（笑）凄く厳しい現場ですが、遊び心もある現場でした。病気や交通事故で死ぬなら、深作組で死にたいくらいですね。

映画を観て、最初から泣きっぱなしだったんです。なんだかわからないけれど、涙が止まらなくて……。物語もそうだし、現場を思い出して、みんなよく頑張ったなぁと思い出して感慨深くなったりしました。物語を客観的に観ると、カルチャーショックを受ける作品だと思います。もし、ああいう状況になったら、それぞれ違う心理が現れてくる。それも面白いなと思いつつ、実際こういうことがあったらとは考えたくないです。でも、なさそうでありそうな感じですよね。将来的に、大人が子供をおそれちゃうことがあるのかもと。

千草はプライドの高い女

千草に関しては、最初は、まさか千草役とは！　という感じでした。ちょっと予想外でした。これまで不思議な役が多くて、普通で元気な女の子役をやってみたかったのですが、千草は元気は元気だけどちょっと違う。今までと比べると普通の女の子だなと思いつつも、普通のシーンもない（笑）。

栗山千明（千草貴子）

1984年10月10日生まれ。映画『死国』(99)のヒロインでデビュー。CX「キャッチボール日和」、TBS「コワイ童話 おやゆび姫」(99)、映画『仮面学園』(00)に出演。

千草は、自分自身を強く持ちすぎているんでしょうね。だから友達が少ない。ほんとに心を許しているのは杉村だけ。好き嫌いがはっきりしてる部分はかっこいいなと思います。新井田を殺すやり方は、最初は嘘かと思ったんですよ。新井田役の本田君から聞いたんです。「股間を刺して倒すんだよ」って。信じてなかったら、ホントでびっくり！　抵抗はなかったです。やっぱりそこまで怒っていることの現れなんでしょうね。

難しかったのはセリフ回し。男勝りなしゃべり方というか、きついじゃないですか。監督には、「千草はただ自分の芯が強いからそういう男の人に、より勝っていることをアピールしたい、プライドが高いところがあるだけで別に不良なわけじゃないからそういう言い方とかには気をつけて」っていうアドバイスをいただきました。声も低めにしています。最初のたけしさんとの絡みの場面で、「先生トイレ行ってもいい？」というところがあるんです。それも、殺し合いをしなければならないという逆境の中で、千草の機転で、場の雰囲気を変えるために言うセリフなんです。実際にトイレに行きたいわけではないので、その言い回しとかもすごい難しかった。そういう千草はかっこいいですね。自分ではできないと思いますね。

千草があんな状況でも走っているのは、自分の生き甲斐である走ることに対しての執着心の現れだと思います。私自身、長距離は好きですが短距離はちょっと苦手。千草の素早い動きを出すために、練習しました。フォームをきれいにするためにも頑張りました。

逆境に立たされた時の、いろいろな生徒の姿が、描かれていて面白い作品。千草は、42人の中ではよい死に方なんじゃないでしょうか。個人的には、最後には杉村に会えてよかったなぁと思います。

映画は、一回観ただけでは、まだ観たりないです。だから、何度でも観ようかと思っています。展開が速くて、撮られていた側の私ですら全然把握できない（笑）。私だけでなく、各シーン、とても時間をかけて撮影がされましたが、それが一瞬で駆け抜けていってしまう。すごいスピード感ですね。

光子が殺す理由を考える

光子には、ああいう性格を生む原因となった、過去があるんです。そのシーンは残念ながらカットされています。そこは私が出演しているわけではなくて、子どものころの光子という設定で、小さい女の子が出てるんです。そのシーンによって光子の見方が変わる気がしていたので、ちょっと残念だったかな。それがわからないと、ただの危ないサイコ女みたいに思われてしまうかな、と少し不安。でも、もちろん、光子を演じているとき、彼女の過去のことを念頭にいれながらやっていました。

光子は女生徒の中では、一番人を殺しています。けれど、私の中では、「殺す」という行為事態にはあまり意味を感じていませんでした。もちろん武器を振り回して、友達を殺しているんですけれど、それは演出に過ぎない気がしたんです。「殺し」は、光子の前向きな生きる気持ちの表現のひとつに過ぎないと思いました。ただ殺すんじゃなくて、時にはウソ泣きしたり、時には色仕掛けで近づいたり、ああいう状況でもお化粧をちゃんとしていたりとか、そういう場面があることで、光子のキャラクターが出ていた気がします。

アクションは、大変でした。スタンガン、拳銃、カマ……、ふだん持たないものばかりですから。カマは特に、どう使っていいのかわからなくて（笑）。監督がとても細かくアクション指導してくださいました。「そんな動き、できませーん」という要求もあって、監督がやったほうが様になるのでは？　という感じのこともありました。「光子、監督がやってください」って、心の中で思ったことも何度もありました（笑）。でも、それをやるのが私の仕事。与えられた役だから、ちゃんとやんなきゃって思いました。だからもう負けじと。「やるんだ！」みたいな気持ちがどんどん強くなっていきました。勉強になりました。最後の安藤さんとの戦いのシーンは、ホントに力いっぱいガツンとやってしまって、ごめんなさいっという感じだったんですよ。命がけでした。

ショートパンツで森を駆けて何十カ所も怪我したり、秋になってもまだ日焼けの跡が消えなかったりしましたが、やってる最中は、痛さや辛さは考えられなかったです。アクション女優としての需要が増えるんじゃないか？　お話があれば、どんどんやっていきたいです。でも、それだけになるのではなく、いろいろ違った役もやっていきたいと思います。

最後の、光子のセリフ。あれは淡々と言いたかったんです。変に感情をつけないで真っ白か真っ黒って感じにしたかった。この映画自体が、白か黒かというか、生か死か、その裏腹な部分がテーマとして描かれていると思います。「殺し」の裏にある、生きる気持ちを感じてもらえたらと良いのですが。

柴咲コウ
相馬光子

1981年8月5日生まれ。「ポンスダブルホワイト」（日本リーバ）のCMで一躍注目される。ANB「アナザヘヴン」(00)、映画「東京ゴミ女」(00)に出演。

撮り終わった瞬間から、緊張が解けてだらだらっとなりましたよ。しばらくずっと寝っぱなしでした。撮影中は眠れなかったんです。プライベートな時間にまで、桐山が安藤政信に浸食してきていた。ふだんなら、客観的に観てる自分がいて、役をやっている自分と会話をしながら仕事をしているんです。「どうだった？」って確認しながら。どういう表情してるかが自分でわかる。でも今回は、客観的な自分がどんどんどんどん扉を閉めちゃって、役をやってる自分が、寝かしてもくれなくなったんですよ。ホントやばかった——。

語られなかった桐山の台詞

本当は最後に「命は平等に価値がない。オレはオレを肯定する」っていう台詞が用意されていたのですが、監督に頼んで、なくしてもらいました。桐山は、命の価値なんてことすら考えてないと思ったんです。桐山は、人を殺すことの喜びだけで生きている。

安藤政信
桐山和雄

1975年5月19日生まれ。北野 武監督の映画『キッズ・リターン』(96)でデビューし、数々の新人賞を受賞。主な出演作は『アドレナリンドライブ』『鉄道員』(99)『スペーストラベラーズ』(00)など。

この感情の表現の仕方は、たとえば自分がやったことのない役があるとして、それを演じることができた喜びは、拳銃を撃ったときの喜びと同じじゃないかなと考えました。やったことのない役をお客さんに見せられる喜びを表現できたら、桐山の役にもなれると思ったんです。桐山の過去なども、いっさい考えませんでした。観ている方にそれを感じさせる必要は、桐山役の場合はないと思ったんです。とにかくゲームに参加することしか考えませんでした。

考えたのは、服装とか髪型。シルエットで見せるシーンも多かったので、陰影で見せるスタイルにしようと思いました。

今まで、おとなしくて受け身な役が多かったので、桐山みたいな役はやってみたかったですね。役者としては、常に新しい役を見せたいから。特に、危険な感じの役は前からやりたいと思っていました。

アクションに関しては、なるべくナチュラルにやりたかったんです。アクション映画ではあるけれど、桐山も素人だから、そんなにかっこよく転がったり、飛んだりできないはず。それに、僕は思い切りがんばってる芝居が、好きじゃないんですよ。

僕は不器用。切り替えがあまり早くないんです。本番に入るちょっと前から集中をはじめないと、できないほう。あと、実は活字を読むのが苦痛で、台本読むのも大変なんです（笑）。気持ちで芝居をするタイプなので、現場の雰囲気が大切なんです。その点、『バトル・ロワイアル』の現場は、すごく楽しかったです。幸せな現場でした。

深作監督には、パワーを吸い込まれるなって思った。この人元気なのは俺の元気を吸い取ったからだ！　って思ったりして（笑）。でも、そう思っててもなぜかいつもいっしょにいる。気がつけばいっしょにご飯食べてたり、僕から側にいってましたね。楽しかったのは、昼休みに深作さんと飲めたこと。「安藤、これおいしいぞ」ってそばを冷酒につけて食べるんですよ。すごく酔っぱらいましたよ（笑）。

1979.10.24生まれ 神奈川県出身
Q1.回避不能という条件のもとに出されていると思うので、戦わずにすます、てのはナシですよね。本当に大切な人だったら、その人を殺そうとして、逆に殺される…ってカンジですかねぇ?できるできないはともかく、自己犠牲の精神をとりたいです。
Q2.保存食及び調理道具一式（やっぱり、食料がないと、強い武器があっても生き残れない）
Q3.監督のパワー、見習わせていただきました。また機会がありましたら、よろしくお願いします。

1981.8.27生まれ 東京都出身
Q1.その時にならないとわからない。
Q2.ベッド、1日中家にいる時は1/3以上この上ですごすから。
Q3.お世話になりました。身体に気をつけて下さい

1982.4.27生まれ 岐阜県出身
Q1.うーんと、今いろんな事考えちゃうから、また明日。
Q2.デロべっぺん、ようかいけむり、カルノフ
Q3.だいすきだいすきです。

1981.9.23生まれ 神奈川県出身
Q1.死にたくもないし、戦いたくもないので、ひたすら逃げます
Q2.1、ナイフ（一番良く使うと思う） 2、コンパスや地図（自分の場所を確認）3、水（水や食料は大事!!）4、薬（必ず必要になる）5、ライター（明りはカンジン）
Q3.深作ワールドに少しでも入れただけで光栄です。ありがとうございました。次回「バトル・ロワイアル2 おだは生きていた!!」をよろしくお願いします。

1974.11.24生まれ 兵庫県出身
Q1.皆で力を合わせて、体制をぶっつぶす♡
Q2.梅干し（最高の毒消しです）
Q3.お願いですから、健康に留意して下さい。あと40本は撮っていただきたいので。

1975.5.19生まれ 神奈川県出身
Q1.……
Q2.……
Q3.僕も深作さんのように映画に対して情熱的に生きていきたい。

1985.9.25生まれ 大阪府出身
Q1.どうだろう…。多分、本当にそうなったら、相手を助けると思う!
Q2.水分!! お茶とか牛乳とか!!
Q3.色々とお世話になりました。本当にありがとうございます。

1977.9.21生まれ 東京都出身
Q1.その時にならないとわかりません。
Q2.ウェットスーツ・シュノーケル・足ヒレ（泳いで脱出）
Q3.これからもお身体に気をつけて、いい映画を作って下さい。

1979.9.12生まれ 埼玉県出身
Q1.本気で戦う
Q2.VX現用神経剤
Q3.100歳まで映画を撮り続けて下さい。

1982.12.2生まれ 福島県出身
Q1.毎日がバトルです
Q2.ドラえもん
Q3.思っていたイメージと違って、暖かい人だと感じました。

1982.2.8生まれ 東京都出身
Q1.ごめんなさい。その場面になっても自分が殺すんだったら、殺されちゃいます。大切な人は殺せないハズ。
Q2.どこでもドアー
Q3.一生アクション映画を撮り続けてください。BRにでられて幸せでした。ありがとうございます。お酒は控えめに。

1979.9.22生まれ 埼玉県出身
Q1.自殺すると思う
Q2.ケータイ
Q3.お身体に気をつけて、いつまでも元気な監督でいて下さい。

1982.4.26生まれ 兵庫県出身
Q1.できれば一緒にいたいけど、できなければその人とは二度と会わないように逃亡したい。
Q2.餓死だけは嫌なので食料は絶対もっていく。あとは鉄砲と薬。
Q3.監督めちゃくちゃパワフルです。

1983.6.22生まれ 神奈川県出身
Q1.多分その場で一緒に死ぬと思う。
Q2.長い日本刀orミサイル
Q3.いろいろお世話になりました。ありがとうございました。また、何かあったら宜しくお願いします。

1982.5.15生まれ 埼玉県出身
Q1.出家します。
Q2.サバイバルナイフ
Q3.すごい作品にしてくださって、ありがとうございました。

1979.9.29生まれ 神奈川県出身
Q1.自分が死にます。
Q2.ピンクのコンバースのスニーカー
Q3.役者人生の中で「バトル・ロワイアル」を演じられたことが嬉しかったです。ありがとうございます。

1983.4.11生まれ 神奈川県出身
Q1.逃げ続ける!!
Q2.やっぱり銃かな!? マシンガンとか…。
Q3.『バトル・ロワイアル』に出演できた事、深作監督の作品に出演できた事は、非常に勉強になりました。今後も、最高の作品をどんどん作っていって下さい。

1983.3.31生まれ 埼玉県出身
Q1.その時になってみないとわからないけど、もしそれが本当にせっぱつまった状況なら殺してしまうかも。
Q2.塩水とかを水に変えるやつ。
Q3.今年の夏休みは本当に楽しく過ごせました。また今年のように楽しく仕事ができるといいですね。

1982.10.27生まれ 東京都出身
Q1.その大切な人を信じて生き残って脱出します。
Q2.好きな食料かな（肉とか）
Q3.2ヶ月半どうもありがとうございました。お身体に気をつけて、これからも素晴らしい映画を撮り続けて下さい。

1980.5.7生まれ 東京都出身
Q1.くやしいけど、戦ってしまうと思う。
Q2.サイレンサー付の銃
Q3.本当に細かい所まで演技指導して下さって、ありがとうございました。次回作にも使っていただけるようにがんばります。

1984.7.20生まれ 東京都出身
Q1.死を選ぶ（かも）
Q2.愛犬（ペット）
Q3.これからも素晴らしい作品を作り続けて下さい!!

SHIROIWA JUNIOR HIGH SCHOOL 3-B

1984.11.6生まれ 大阪府出身
Q1.先に自殺する。
Q2.TV・電話・いつでも帰れるように飛行機。
Q3.いつまでも、いつまでもお元気で…。

1981.12.25生まれ 神奈川県出身
Q1.絶対戦えません！　けれど追いつめられてしまったとしたら、その人を殺して、自分も死ぬと思う。
Q2.ウージーです。持っておけば安心な気がするから…相手を脅かすために！（人を殺すためではないですよ！）
Q3.ビシビシ鍛えて下さってありがとうございます!!　撮影中に頂いた食べかけの和菓子の味は一生忘れません！　いつか監督を唸らせるような役者になりたいです。大好きです♥

1982.8.29生まれ 愛媛県出身
Q1.大切な人には生きてほしいので、自分が死ぬ!!
Q2.サバイバルナイフ
Q3.また会えることを願っています♥

1981.5.13生まれ 東京都出身
Q1.殺すか殺されるかしかないなら、殺されるほうがいいです。でも、できれば大切な人とその状況から逃げ出したい。
Q2.虫よけと、博識な頭脳と、精神力。これがあれば何とか生きていけると思います。
Q3.監督と接して「人生を満喫する、楽しむ」とはこういう事かなと思いました。私も監督のように、自分にとって最高の人生を送りたいと思います。いろいろとありがとうございました。

1979.11.30生まれ 東京都出身
Q1.本当に相手のことを大切に想っていたら、何も手をだせないと想う。
Q2.水、サバイバルナイフ
Q3.私にたくさんの宝物をくださってありがとうございました。また一緒に仕事のできる日を楽しみにしています。

1984.7.18生まれ 埼玉県出身
Q1.相手の出方を待つ。死んだふりして相手の反応を見たい、というのは願望で本当にそんなことがあったら戦えないと思います。
Q2.ドラえもん
Q3.監督の声忘れません。心境の変化などこまかく教えていただきました。本当にありがとうございました。未熟な私ですが、もっと勉強します。

1985.2.3生まれ 石川県出身
Q1.一緒に逃げる
Q2.マシンガン
Q3.体力がありすぎてビックリです！ どうもありがとうございましたー!!

1985.9.25生まれ 茨城県出身
Q1.戦う。その戦いで死んでもその人の事を見守っていきたいし、私が生き残ったとしても一生その人の事を考えて生きていくと思う。
Q2.どこでもドア
Q3.バトル・ロワイアル最高!!　ありがとうございました。

1984.7.11生まれ 東京都出身
Q1.最初は、大切な人とは戦わないで逃げ出す方法を考えるけど、最悪の状態に陥った場合真剣勝負で立ち向かう。
Q2.3日間、透明人間になる薬!!
Q3.今回の撮影で演技や感情表現などを、とても真剣に指導していただきありがとうございました。これからも時には厳しく、時には優しく、そしてカワイイ監督でいて下さい。あと、あまり無理をせずいつまでも元気いっぱいの監督でいてくださいねっ。

1982.3.29生まれ 東京都出身
Q1.それがもし家族や彼氏であれば自分も一緒に死ぬ。でも友達であれば戦うと思う。
Q2.やっぱり銃しかない。
Q3.すごくいい作品に出られてよかった。ありえない事だけど人間との戦いとか人間の醜さとか考えられて良かった。ありがとうございます。

1981.8.5生まれ 東京都出身
Q1.他に自分が守るべきもの（家族or恋人or友達）がいるとしたら、相手を殺してでも戦うと思う。（死ぬ思いでも）
Q2.カマ。（なんとなく）
Q3.光子…私にぴったりでした。光子を通して演技というものをすごく深く考えさせられました。ありがとうございます。そしてこれからもよろしく…。

1984.7.4生まれ 埼玉県出身
Q1.一緒に死ぬ。自分は絶対大切な人を殺せないと思う。だから、どちらかが死ななきゃならないとしたら、自分を殺してもらうと思います。
Q2.ウージー、防弾チョッキ
Q3.演技やアクションなどとても勉強させていただいたし、いい体験をさせて頂きました。これからも、健康でいて下さい！そしていい作品をどんどん作って下さい！今度監督にお会いする時はもっといい女性になって演技が上達している様がんばります！

1984.10.10生まれ 茨城県出身
Q1.自ら命を絶っちゃうかもしれません。
Q2.火とか水とか
Q3.今回、自分の中で新しい役、体験したことのないような役をやらせていただきました。すごく悩んで、実際現場でもいろいろご迷惑をかけたと思うのですが、監督に助けられました。一日、一日、思い出に残る撮影現場で、楽しかったです。ありがとうございました。

1983.11.14 福岡県出身
Q1.私には人は殺せません。みんなで生き延びたい!!
Q2.食料
Q3.ステキなサングラス、私にください♡

1985.7.11生まれ 東京都出身
Q1.自分で死ぬ
Q2.虫がコワイので殺虫剤
Q3.ふだんは優しく、演技には厳しく、とても勉強させていただきました。本当にステキな方に出逢えてよかったです。

1984.7.3生まれ 東京都出身
Q1.自分から相手を手に掛ける事はしたくないので戦いません。
Q2.戦うならMUZI、戦わないのならナイフ
Q3.撮影お疲れ様でした。本番では何かと気を使って下さりありがとうございました。いつも元気な監督が大好きです。これからも頑張って下さい。私も頑張ります。最後にもう一度、ありがとうございました。

1982.4.20生まれ 神奈川県出身
Q1.死にたくないので戦います。この作品で「死ぬ」ということの先にはやっぱり何もなく、ただ無様な死しか転がっていないと強く実感しましたので、それ以上の答えはないと思いますが…？
Q2.マイクロUZI“ヘタな鉄砲も数撃ちゃ当たる”とは、まさにこのこと（笑）
Q3.一言では言い表せません、感謝することが多すぎて。監督との出逢いは私の一生の財産です。

1980.1.8生まれ 兵庫県出身
Q1.戦うふりをして殺される
Q2.ナイフ
Q3.監督の「Very　good!」が頭から離れません。

1984.8.21生まれ 神奈川県出身
Q1.相手を信じて闘わないで逃げると思います
Q2.防弾チョッキ、武器はこわいので…。
Q3.多くの事を教えて下さってありがとうございました。お身体に気をつけてこれからもすばらしい映画を作って下さい。

1983.1.11生まれ 大阪府出身
Q1.自分は殺されることがあっても、自分からはできない。
Q2.ピストル（食料）
Q3.監督の作品に出演させていただけたこと、すごく嬉しいです。監督のパワーにびっくり!!

1982.8.29生まれ 東京都出身
Q1.時間の最後までどうにか助かる方法を考えて、なにも出来ないまま時間が来てしまったらみんなで殺し合う。何も抵抗しないで一斉に。
Q2.吹き矢（笛みたいになっててハリに毒がついてる）。本当はドラえもんのポケットが一番いいなぁ。
Q3.楽しくって元気な監督。本当に大好きです。また絶対に同じ時間を過ごしたいです。

どちらかというと殺す方？

深作さんに撮ってもらえるというのは、もちろん光栄に思ってますよ。ラッシュも見せていただきましたけど、僕の原作に比べて、よりストレートに怖い感じが出てるな、と思いました。極限状態の切迫感、恐怖感というのが伝わる画面になってますね。

僕自身はこの本を書くときに、大人の話でもいいなと思ったんですよ。ただ、僕がこの話を思いついたきっかけというのが、「は〜い皆さん今日は殺し合いだぞ〜っ」というようなことを明るく言い出す先生がいたらコワいな、ということだったわけです。その先生のイメージが「金八先生」の武田鉄矢さんだったもんだから、天啓を与えてくれた武田さんに敬意を表して、やはり中学生、同時に、パロディの要素も残しました。

だけど、深作さんが僕にオファーをくださったというのはむしろ、「死と向き合う中学生」という設定そのものに興味を持たれたかららしいんですよね。その辺りの違い、「とりあえず中学生でよし」ということでエンターテインメント路線を突っ走るのか、それとも「中学生だからこそ」として、ある程度リアルな少年少女の皮膚感覚みたいなものを大事にするのかという違いは、最終的な作品のトーンの違いに反映されてくると思います。それはもう、どちらがいい悪いではなくてつくる人間のセンスの問題ですから、僕としてはとにかく完成を楽しみに待たせてもらうつもりですけどね。

原作者

それから、映画では原作にあった、そのパロディ的な教師像を避けることになりました。自然、その穴を埋めようとするなら、個人でもって非常に存在感のある役者さんが必要になってくるわけですけど、その点、たけしさんというのは、もうこれ以上望めないキャスティングでしたね。まあ、僕はタケちゃんマンを見て育ってきた世代なんで、そういうややこしいこと抜きに、うれしい、最高！　というのもありましたけどね。

僕がこの「バトル」の状況に置かれたらですか？　これだけは自慢していいと思うんですが、僕には最高の仲間がたくさんいるんですよ。僕は彼らにいくつも借りがあるし、彼らにだったらば殺されたって構わない。もっとも、彼らは立派な人間なのでそんなことしない、どちらかというと僕の方が殺すんでしょうけど。我ながら汚ねエからなあ……。

×とは否定・拒否の記号であると同時に、出逢い、
そして愛と友情のシンボルである。
愛するとは、感じること。感じるから信じられる。
愛するとは愛し続けること。信じるとは信じ続けること。

監督が気に入ってくださって、BA-TSUでつくっているスーツの中から、映画の制服を選んでもらうことになりました。最初、監督はセーラー服が良いと思われていたようですが、アクションが映えるラインは、ジャケットだということになりました。ネクタイは、いろいろデザインを考えたんですが、パッと画面を見たときに、ネクタイに情報量が多いと、そこに目がいってしまうという監督の判断で、ワンポイントになりました。ジャケットも、BA-TSUのラインは、上1個以外はボタンで隠されているんですが、映画ではオーソドックスなスタイルになっています。このように制服ひとつとってみても、細かいやりとりのもとに準備されています。

実は深作監督は、最初、×のマークを気に入って使いたいと思ってくださったみたいなんです。×って、手と手がぶつかりあうイメージでしょう。対立、そして、そこから生まれる理解の象徴なんです。『バトル・ロワイアル』のテーマはまさにそれだと思います。今の若い世代はお互いを主張しあって、激しく喧嘩することも少ないのかもしれません。でも、たとえば感性のままに、本気で喧嘩するからこそ理解しあえる、そんな出逢いのプロセスもあるんじゃないでしょうか。若者の心の中には「×の時代・×の文化」が燦然と輝いているのです。

松本ルキ

RUKI MATSUMOTO
BA-TSU CREATIVE DIRECTOR

映画のテーマは何かって言葉にすることはないと思う。観て感じることだから。観た人の知識や感性のレベルで感じ方は変わるものだよね。

北野のままでと言われたけれど

最初に、深作監督から「イメージがたけしさんだから」と先生役のオファーがあったんです。学生時代から憧れていた深作監督に頼まれたら、喜んで出たいと思ったけれど、役の名前まで「北野武」だった。地のままで出るのは勘弁してくれって言ったら、カタカナのキタノになったんだけど。武のイメージって言ってもね、本性は皆、知らないわけだから、テレビや映画の画面から受けるイメージでいいんだろうと思って演じました。でも、監督は地のままでって言いながら、実際、撮ってるときは注文が多いんだよね（笑）。

深作監督は、とても細かい演出をする人ですね。観てきた映画の印象では、荒々しいのかと思ってたんですよ。ハンディカメラ振り回して撮る元祖だと思っていたし。でも案外緻密。フレームの中の位置関係に異常にうるさい。台詞をしゃべっている役者じゃない、後ろにちょっと映ってる役者の演技にもこだわってる。動くことと止まることの、リズムにうるさい。要求する動きが早いよね。俺なんて、わざとたらたら、間を作って演技しちゃうほうなんだけど、

ビート（キタノ）たけし

1947年1月18日生まれ。タレント"ビートたけし"としては数々のレギュラー番組を持ち、一方、映画監督"北野 武"としては『HANA-BI』(97)でベネツィア国際映画祭金獅子賞を獲得するなど世界が注目する映画人であり、最新作『BROTHER』(01)の公開が控えている。本作は大島渚監督『御法度』(00)に続いての映画出演となる。

間をつめてくれってよく言われました。俺より年上なのに、テンションが高いし、サイクルが早い。ぐんぐん内容を押し込んでいくよね。頭脳は緻密で、体は精力的に動き回っている。現場で一番元気だもんね。巨匠なのにそう見えない。いつも走り回ってるから。スタッフがバタバタ倒れていくのに（笑）。俺の映画も撮ってくれているキャメラマン柳島さんなんて、だんだん目が落ちくぼんできてた。映画に対する情熱が違う気がしましたね。粘るよね。俺なんてワンテイクでOK出しちゃうから。いい勉強になりました。かつて「その男、凶暴につき」で監督をお願いするという話もあったんですが。あのときお願いしていたら、この厳しい現場を観て、俺は映画を撮っていなかったかもしれない。今度は、監督のヤクザ映画に出たいですね。地方のヤクザじゃなくて東京のヤクザの話をやってくれないかな。

「暴力」をふるうには覚悟がいる

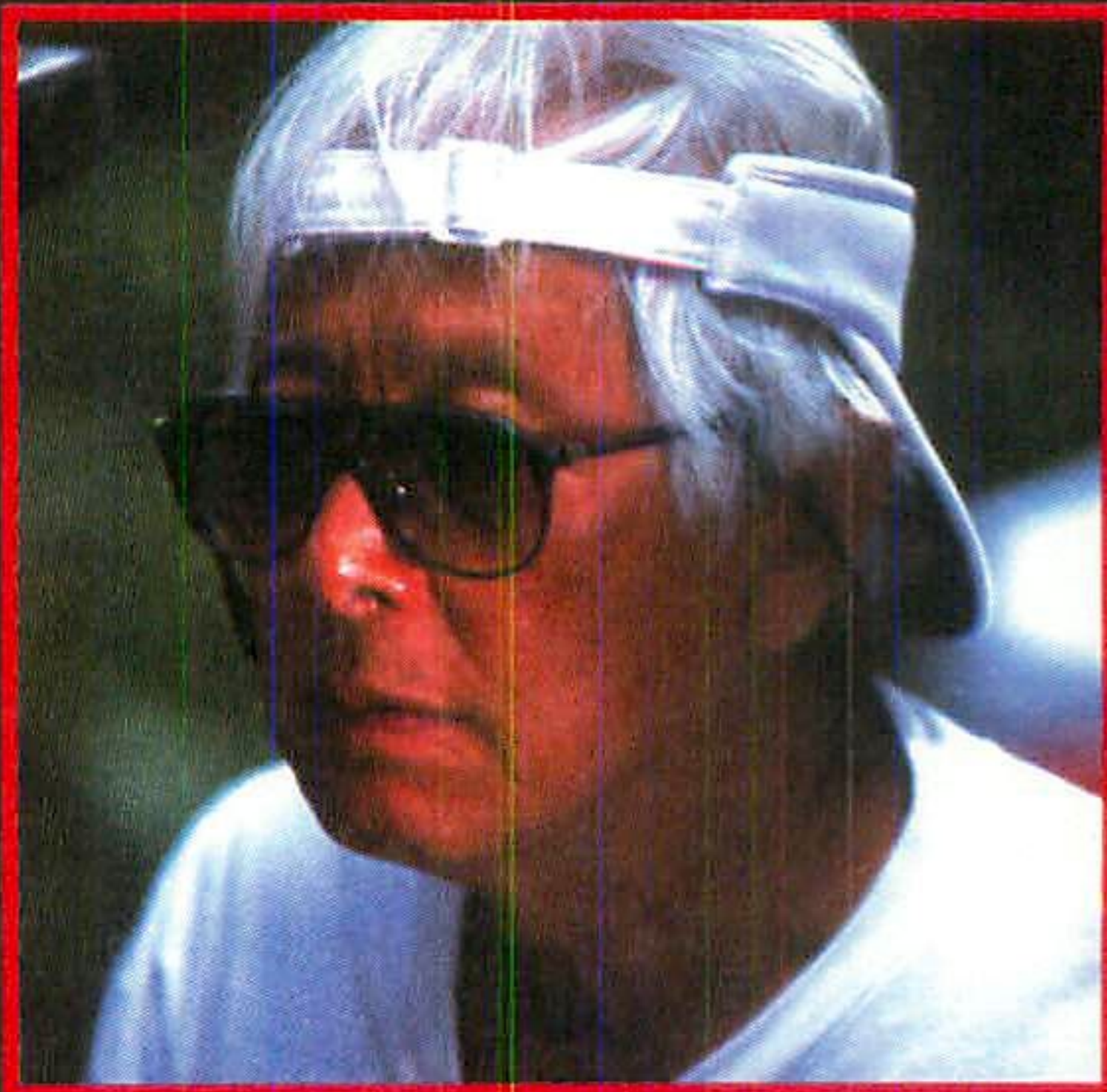
俺は役者としてやるときは、役作りはしない。監督に言われたことをやるようにしています。監督のやりたいことができるようにしているのが役者だと思う。自分でヘンに作りこんでいったり、思い入れたりすると、監督との意見が違ったときに修正するのが大変だから。俺自身が、監督のときは、役者にいろいろ意見出されるのが嫌なんですよ。原作も読んでいません。映画の脚本は原作と変えてあるらしいので、読んでも混乱するかなって思って。物語の内容について俺なりに深く考えるんじゃなくて、監督の指示に従うだけですね。少しは内容についても考えるけど、そうですね、はじめは子供がキレて、だんだん大人もキレはじめて。そうなってみると大人は子供以上に残酷だったということだよね。キタノも最初は生徒にいじめられていて、惨めな感じなんだけど、狂気を持った男に豹変する。そして、そんなヤツだけど、中川という好きな子がいるんだよね。中川には夢を見てるっていうか。

ビートたけしの笑いの部分は、あまり要求されてないみたいですね。原作はちょっとコミカルなんでしょ。映画は、笑いの部分は排除されている気がします。

俺の15歳時代？ 16クラス×60人なんていう状態で、先生が生徒の顔を覚えてないってこともあった。成績の良い子と勉強ができない子との差別も激しくて。俺はバカ組の代表だったな（笑）。

昔の暴力は、コミュニケーションのひとつでもあったよね。今は、ただの体罰になっているけれど。「暴力」という行為は、ふるうやつは、ふるわれる覚悟がいるってことだと思う。それと同じで、愛することは、時にあえて自分の存在を消すっていうことかもしれないし、暴力にでることもあるかもしれない。いずれにしても覚悟がいることなんだよね。

人のこと、嫌いになるってのはとても覚悟のいることなんだぞ。

BEAT TAKESHI/TEACHER_KITANO

バイオレンス映画の巨匠・深作欣二監督の暴力表現の神髄に迫る初のビデオ作品!!

日本映画界を代表する深作監督が70歳にして60作目の記念すべき作品として選んだ『バトル・ロワイアル』の緊迫した撮影現場に密着取材! 監督や出演者のインタビュー・撮影現場の秘話など、数々の見所が満載! かつての名作『現代やくざ 人斬り与太』『人斬り与太 狂犬三兄弟』『仁義なき戦い』『県警対組織暴力』などの名シーンも収録され、映画だけではわからなかった"BR"完全ドキュメンタリー、怒濤の223分!!

徹底検証! 仁義なき映画術のすべて。

映画は戦場だ
深作欣二 in『バトル・ロワイアル』

2001年1月21日(日)発売!
定価 ¥7,800(税抜)・ビデオ2巻組

■出演:深作欣二／藤原竜也　前田亜季　山本太郎　栗山千明　柴咲コウ　安藤政信／ビートたけし　ほか『バトル・ロワイアル』スタッフたち

■構成・演出:浦谷年良　■制作:テレビマンユニオン

カラー／VHS／2巻組・223分／品番:VFZF01033
発売元:メディアファクトリー
販売元:東映株式会社　東映ビデオ株式会社

©テレビマンユニオン／2000年「バトル・ロワイアル」製作委員会

トーエイ　ミヨー
0120-1081-34

東映株式会社　東映ビデオ株式会社　最新情報をチェック http://www.toei-video.co.jp/

お近くのレコード店等、ビデオ取り扱い店でお求めください。
お買い求めになりにくい方は、フリーダイヤルでお申し込みください。
●電話受付:休日を除く月曜～土曜/10:00～20:00 ●送料:5本まで600円、6本以上一括でご注文は無料。★宅急便でお届けの際、送料と商品代金をお支払いください。★お願い:郵便時の破損及び誤発送以外は、開封後の返品、交換はご容赦ください。注文は商品番号でお申し込みください。

映画と小説、『バトル・ロワイアル』をさらに楽しむためのサブ・テキスト

BATTLE ROYALE INSIDER
バトル・ロワイアル・インサイダー
公式メイキング・ブック

BRI
バトル・ロワイアル・インサイダー

第1部 映画篇
○映画『バトル・ロワイアル』ストーリーライン／42人生徒名簿／死亡者チャート／ゲーム島マップ／42人完全武器リスト
●深作欣二監督ロングインタビュー／ギンティ小林の撮影現場密着取材日記／スタッフ・インタビュー「我ら深(夜)作(業)組－深作監督欠席裁判－」／長編評論－山根貞男他

第2部 小説篇
○『バトル・ロワイアル』が世に出るまで(日本ホラー大賞落選～刊行までのプロセス)／高見広春ロング・インタビュー／小説論／フロム『バト・ロワ』フリーク／高見広春より読者へ／ボーナストラック『バトル・ロワイアル』草稿、未使用エピソード公開

監修:高見広春／『バトル・ロワイアル』製作委員会　定価 1554円(税込)

50万部突破!!今世紀最大の問題小説!!

BATTLE ROYALE バトル・ロワイアル
高見広春　定価1554円(税込)

太田出版　〒160-8571 東京都新宿区荒木町22 エプコットビル1F TEL 03-3359-6262

てもらいまーす。
っ殺してやるよ。
・・狂ってるよ！どうして
な簡単に
オレが
いいかー、人生はゲー
BATTLE ROYALE